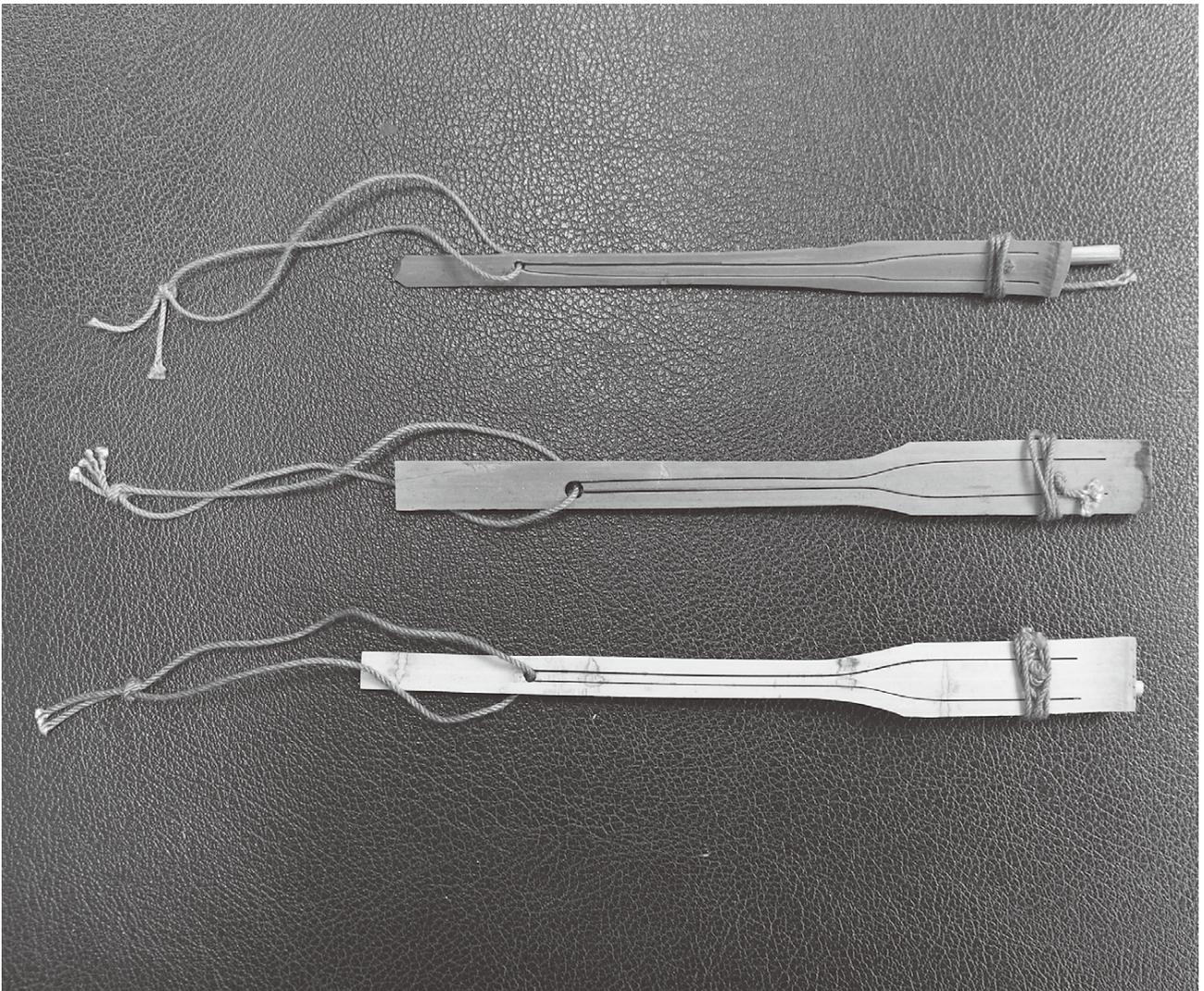


Science Report of Kushiro City Museum

釧路市立博物館報

NO.435



2025.3

「身近に感じる釧路湿原」

温根内ビジターセンターは環境省が設置した施設で、釧路湿原国立公園の西の端にあります。併設されている木道は1周すると湿原部分約2km、村営軌道敷跡部分約1.1km、合わせて約3.1kmで、ショートカットできるコースを含めると約3.7kmあり、そのうち約1.7kmはバリアフリーです。低層湿原、高層湿原、湿原に面する丘陵地林縁部をめぐることができるお得なコースで、氷河期の遺存種と呼ばれるハナタネツケバナやエソカオジロトンボ、様々な植物や野鳥、昆虫などを間近で観察することができます。皆さまの中にも歩いたことのある方は多いのではないのでしょうか。

私は2013年から温根内ビジターセンターで働いています。(公財)日本鳥類保護連盟の職員として、環境省や釧路湿原国立公園連絡協議会からビジターセンターの管理運営を請け負い、環境教育や観光案内、施設の維持管理、情報発信などを行っています。日々の生き物や風景を記録するのも我々の大切な仕事です。

ここに来る以前は環境省のアクティブレンジャーとして希少種保護に携わり、その後タンチョウの保護・研究を行うNPOで働いていました。釧路川源流部でカヌーガイドをしていた時期もあり、日々道東の大自然を満喫しています。

もともと東京生まれ栃木育ちで、育った家の周りには田んぼが広がり、トンボやカマキリ、カエルやザリガニをつかまえて楽しむ幼少期を過ごしました。大学卒業後

には都会で自然と全く関わりのない仕事に就いていましたが、旅行で訪れた道東の風景に魅了され、仕事を辞めて18年前に北海道へ移住してきました。

温根内ビジターセンターで働いていると、四季の移ろいを肌で感じることができます。雪解けとともに花を咲かせるキタミフクジュソウ。繁殖のために長く危険な旅を続けて釧路湿原へ帰ってくるノビタキやオオジュリン。様々な種が入れ替わりながら次々と花を咲かせて生い茂っていく湿原。風を利用して子孫を遠くまで運ぼうとするヨシヤガマ。ハンノキで越冬するミドリシジミの小さな卵。種を越えて協力しながら越冬期をたくましく生き抜くハシトガラやシジュウカラ。釧路湿原の生き物たちが、ここでどのようにいのちをつないでいるのか想像しながら観察していると、新しい発見ばかりで飽きることはありません。

これから春を迎える釧路湿原。厳しい冬をじっと耐えた生き物たちが活発に活動を始めます。渡り鳥たちも次々と生まれ故郷の釧路湿原へ帰ってきます。ここは一年を通して湿原を身近に感じることでできるとてもいい場所です。皆さまぜひお気軽に遊びに来てください。私もまた釧路湿原の新たな四季を楽しみたいと思います。

釧路湿原国立公園温根内ビジターセンター
センター長 本藤 泰朗

3月号目次

| | | |
|--|-----------|----|
| 企画展「クスルン ムックル オルシペ～釧路のムックリ三代の物語～」を開催 | 城石 梨奈 | 3 |
| 収蔵資料ミニ展示「クジャクヤママユとヘルマン・ヘッセ『少年の日の思い出』の世界」 | 土屋 慶丞 | 7 |
| 旧音別町の神社 | 戸田 恭司 | 8 |
| 塘路湖畔で初確認されたチャイロスズメバチの記録 | 高橋 進・三浦 武 | 9 |
| 釧路市街地周辺のカラスのねぐらについて | 貞國 利夫 | 10 |
| 博物館ニュース | | 12 |

〈表紙写真〉 企画展「クスルン ムックル オルシペ～釧路のムックリ三代の物語～」でご紹介した、三世代で製作を受け継いできたムックリ。上から、秋辺福治氏製作、秋辺福太郎氏製作、鈴木紀美代氏製作。(資料所蔵：Chaz氏)

(城石 梨奈)

釧路市立博物館館報 No.435 2025年3月号 2025年(令和7年)3月31日発行

発行 釧路市立博物館 〒085-0822 釧路市春湖台1-7

☎ 0154-41-5809

釧路市立博物館Web <https://www.city.kushiro.lg.jp/museum/museum@city.kushiro.lg.jp>

発行責任者 秋葉 薫 編集 貞國 利夫 印刷 (株)藤プリント